いまどきの歴史

一番新しい日本の一ページ

脱線事故

大企業にもかかわらず、なぜ被害者の気持ちを考えた対応ができないのか？

JR福知山線の脱線事故は、京滋の大学に通う若い人々を含め、多くの犠牲者を出した。さらに事故原因を究明する過程で、安全対策の欠如、日勤教育の是非、社員の倫理観など、さまざまな問題が浮上したが、筆者が考えた要素はこうだ。

一連の不祥事に関する会見では、JR西日本の社長や技術部長などが行っていたが、的確な回答が行えない場面が多々あった。もちろん、謝罪の現場では責任者が出席するのが当然だが、報道関係者の質問に対する窓口となる広報なり、スポークスマンを置いた方が適切な対応ができたのではないだろうか。JR西日本のような大企業ともなると、無個性な人間をトップにする傾向がある。報道陣の容赦ない質問に対し、戸惑い、おびえ、無感情に対応する（ように見えた）担当者の姿は、実に頼りなかった。万一の事態の適切な対応を目指すなら、被害者の気持ちを第一に考え、行動できるブレーンと、国民感情を慮って発言できるスポークスマン、対策室を置くべき。JR西日本が失ったものよりも、被害者が失ったものの方がはるかに大きいことがわかっていれば、それぐらいできるはずだ。

業務提携

世界に通用するサッカー選手育成計画 これを皮切りにより活発な産学提携を

Jリーグの京都パープルサンガと京セラ、立命館がScholar-Athlete Projectを発足した。これはサンガの下部組織の選手を全寮制で受入れるとともに、立命館宇治高校に入学させるというもの。一方、サンガは立命館宇治高校の運動部に対してもサポートを行い、京セラはプロジェクトの資金をバックアップする。これが機能すれば、若いサッカー選手の文武両道が実現。海外でプレーする際に必要な語学力も、ユース世代のうちに身に付けることができるというわけだ。数年後、ここから世界へ羽ばたく選手が出ることを願う。立命館は一芸入試など、若者の個性と能力を伸ばす制度をいち早く導入した総合学園。今回のプロジェクト発足を皮切りに、さまざまな形で産学の新しい関係を築いて欲しい。企業の研究を大学にアウトソーシングするとか、企業が積極的に学生のインターンシップを受け入れるとか、産学の協力によって生じるメリットは限りなく大きい。

日中外交

いつまでたっても心が通わない日中関係。口喧嘩でもいいから、とにかく対話を。

先だって完成した京都迎賓館のこけら落としとなった日中の外相会談だったが、またも暗礁に乗り上げた。その理由のひとつが小泉首相ほか政治家たちによる「靖国神社参拝」。これに対し、小泉首相は「あくまで私人として参拝している」「戦没者に手を合わせることの何が悪い」の一点張り。確かに中国側が主張する靖国参拝問題や教科書問題は内政干渉かも知れない。しかし、日本政府は中国に対し、説明が足りない。なぜ「靖国神社で手を合わせて愚かな戦争の犠牲者すべての霊の平安を祈り、二度と同じ過ちを繰り返さない強い意志を再確認した」と心のこもった言葉で説明したり、現在共同で進めている歴史問題の成果を両国で広く発表したりしないのか？ 今、中国に対して必要なのは、これまでのような言葉による謝罪ではない。謝罪を起点とした両国の対話である。対話で意見が衝突するのはおおいに結構だが、対話も歩み寄りも見られず、「靖国神社」というひとつの要素で外交がつまずくのは実に残念だ。

文◎大塚　祐希

京都で活動するライター集団・大塚祐希事務所CEO。昨年のイスラエル滞在以来、異文化を紹介するTEXTREAM PROJECTを始動。20カ国に及ぶ人々とネットワークを構築し、ボーダレスな活躍を目論む。
HP●http://www1.ocn.ne.jp/~tsukapon/

イラスト◎両口　和史

1967年京都市生まれ。京都精華大学美術学部卒業。北山のオフィスにて様々なキャラクターやイラスト制作をおこなうユニット「キャトル・イラストレーション」のチーフ。猫、フランス車、家具、雑貨、レコード、本、おもちゃ、平日の公園。それらがイラストを構成するエッセンスである。HP●http://www.d1.dion.ne.jp/~ryoguchi